

2024/5/19

## ルカの福音書 講解メッセージ⑥

### 『ルカの福音書 3章 1-17節 バプテスマのヨハネ』

「皇帝テベリオの治世の第十五年、ポンテオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの国主、その兄弟ピリポがイツリヤとテラコニテ地方の国主、ルサニヤがアビレネの国主であり、アンナスとカヤパが大祭司であったころ、神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに下った。」（ルカ 3:1-2）

ルカの福音書は当時のことが正確に書かれています。もし間違った内容が書かれていれば、その時代を生きている人たちに淘汰されてしまったでしょう。つまり、福音書の内容は人々に支持される真実であったことがわかります。

さて、「ヨハネに神のことばが下った」とありますが、神のことばがくだるのはヨハネに限ったことではありません。神は、すべての人に語り掛けておられます。

#### ※ 水のバプテスマ

「そこでヨハネは、ヨルダン川のほとりのすべての地方に行って、罪が赦されるための悔い改めに基づくバプテスマを説いた。」（ルカ 3:3）

「悔い改め」と訳されている言葉は、ギリシャ語「メタノエオー（向きを変える）」です。つまり、「悔い改め」とは、「反省する」という意味ではなく、「神のもとに行く」という意味です。病気の人が医者のもとに行くように、苦しみを感じたら神のもとにも来なさいということです。

ですから、「罪が赦されるための悔い改めに基づくバプテスマ」とは、「神のもとに行く決心をバプテスマによって表す」ということです。「神のもとに行く」とは、罪が赦される恵みを受け取ることです。神は愛ですから、神のもとに行く者は罪が赦されるのです。

放蕩息子のたとえで、放蕩息子がお父さんのもとに帰ると、すべてを語らないうちに無条件に受け入れられ歓迎されました。つまり、神のもとに行くことで罪が赦され

るのです。そのために神の方向に向きを変える必要があるので、その決心をバプテスマによって表しなさいということです。

バプテスマの意味は、浸すという意味です。水でバプテスマを受けることで、神と共に歩む新しい人生を決心し、歩み始めます。それが、罪の赦しを受け取ったということになるのです。

「そのことは預言者イザヤのことばの書に書いてあるとおりである。「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。すべての谷はうずめられ、すべての山と丘とは低くされ、曲がった所はまっすぐになり、でこぼこ道は平らになる。こうして、あらゆる人が、神の救いを見るようになる。』」（ルカ 3:4-6）

旧約聖書の預言が、イエス様の誕生によって、ここに成就したということです。その証として、ヨハネはバプテスマを授けているのです。

「それで、ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。それならそれで、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』などと心の中で言い始めてはいけません。よく言っておくが、神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです。」（ルカ 3:7-8）

バプテスマを受けに来た人たちの中には、形式だけ受けに来た人たちがいました。彼らは、自分たちはアブラハムの子孫で特別な者であり、律法を守っているのだからバプテスマは必要ないと思いつつ、形だけのバプテスマを求めていたのです。このような人たちを、ヨハネは厳しく批判しています。

ヨハネだけではありません。パウロも同じようにユダヤ人を痛烈に批判している場面があります。

「もし、あなたが自分をユダヤ人ととなえ、律法を持つことに安んじ、神を誇り、みこころを知り、なすべきことが何であるかを律法に教えられてわきまえ、また、知識と真理の具体的な形として律法を持っているため、盲人の案内人、やみの中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だと自任しているのな

ら、どうして、人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。」（ローマ 2:17-21）

「外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上の中の割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御靈による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです。」（ローマ 2:28-29）

「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人にとっても神ではないのでしょうか。確かに神は、異邦人にとっても、神です。」（ローマ 3:28-29）

このように、聖書は、ユダヤ人が特別であるとは教えていません。大事なのは、外見ではなく、心の向きです。神はすべての人に平等であり、行いや律法ではなく信仰を見ておられます。信仰とは、神の呼びかけに応答し、心を神に向ける行為です。

心を神に向けるとは、自分の限界を知り、神の前にへりくだり、神に憐れみを請うことです。そのしるしが、水のバプテスマです。何ができるかではなく、何ができないかという自分の限界を知ることが大切なのです。これが信仰の始まりになります。

ところが、ユダヤ人たちは、アブラハムの血筋であり、律法を持っていることに安住し、何ができるかを誇り、何かができることで神との関係を築けると勘違いしていました。しかし、そうではなく、自分は何も持っていないと知る者こそが、神との関係を築けるのです。

## ❖ 良い実とは

「斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」（ルカ 3:9）

この「良い実」に関しても、多くの人が勘違いをしています。「良い実」とは、良い行いができるという意味ではありません。良い実を結ぶためには、木につながっていなければなりません。イエス様が「私はぶどうの木であり、あなたがたは枝である」

と言わされたように、神という木にしっかりとつながっていなければ、実を結ぶことはできません。ですから、良い実を結ぶとは、神としっかりとつながっているということです。神と結びついていない枝は、滅びるしかありません。そして、神と結びつくとは、自分の限界を知り、神の前にへりくだることです。自分の限界を知り、神の前にへりくだればへりくだるほど、神の前に助けを求めることができます。これが信仰です。

「群衆はヨハネに尋ねた。「それでは、私たちはどうすればよいのでしょうか。」彼は答えて言った。「下着を二枚持っている者は、一つも持たない者に分けなさい。食べ物を持っている者も、そうしなさい。」取税人たちも、バプテスマを受けに出て来て、言った。「先生。私たちはどうすればよいのでしょうか。」ヨハネは彼らに言った。「決められたもの以上には、何も取り立ててはいけません。」兵士たちも、彼に尋ねて言った。「私たちはどうすればよいのでしょうか。」ヨハネは言った。「だれからも、力ずくで金をゆすったり、無実の者を責めたりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」（ルカ 3:10-14）

良い実を結ばない者は滅びると聞いて、どうすればよいかと人々が尋ねてきました。ヨハネの返答を一言にまとめるなら「隣人を愛せよ」ということです。

なぜヨハネはこのように答えたのでしょうか。それは、自分を愛するように隣人を愛することを真面目に実行しようとするならば、すぐに自分にはできないという限界にぶつかるからです。そんなことをしたら、どうやって生きればいいのか不安になってしまいます。こうして、限界にぶつかったら神の前にへりくだることができ、助けを請うができるようになります。それがねらいです。

つまり、良い実を結ばせるためには自分の限界に気づかなければならぬのです。限界に気づくために、神の律法があると聖書は教えています。人は、何かができることが信仰だと思っていますが、そうではなく、神に憐れみを求め、助けを求めることが信仰なのです。その信仰を手にするためには、自分の限界を知る必要があります。そして、神の前にへりくだる決心として水のバプテスマを受け、自分が救われていることを確認するということです。

## ※ 聖霊と火のバプテスマ

「民衆は救い主を待ち望んでおり、みな心の中で、ヨハネについて、もしかするとこの方がキリストではあるまいか、と考えていたので、ヨハネはみなに答えて言った。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりもさらに力のある方がおいでになります。私などは、その方のくつのひもを解く値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。また手に箕を持って脱穀場をことごとくきよめ、麦を倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。」（ルカ 3:15-17）

「バプテスマ」は「浸す」という意味です。聖霊様は、三位一体の神の中で、神と人との距離を縮めて結びあわせる役割です。神と結びつくことで永遠のいのちを得ます。つまり、聖霊の働きは神と人とを結び合わせて永遠のいのちを得させるということになります。これは、ヨハネにはできないことです。ヨハネの働きは、人々の心を神の方向に向かわせ、救いの自覚を与えることです。救うのは神です。

次に「火」の働きは、罪を焼き尽くすことです。罪とは不信仰のことです。神との距離を縮めるのが信仰ですから、逆にその距離を離すのが不信仰です。神を信頼しようとしない罪を焼き尽くすのが火です。つまり、聖霊は私たちのうちに働いて罪を明らかにし、その罪を焼き尽くします。私たちの中にある不信仰を焼き尽くし、神との距離を縮めること、これを聖霊と火のバプテスマという言い方をしています。神と再結合し、永遠のいのちを持った者が、さらに神との関係を深くできるように、私たちの中から不信仰を取り除いて、神と友の関係を築けるようにするのです。

「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」（ヘブル 12:2）

イエス様のことばを信頼する信仰を築くために、神は私たちを訓練して、不信仰を取り除き、平安な義の実を結ばせます。神を信頼する信仰による平安を得させてくださるのであります。

「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」（ヘブル 12:11）

このことが、次のようにまとめられています。

「私たちの神は焼き尽くす火です。」（ヘブル 12:29）

火のバプテスマとは、救われた人から不信仰を取り除き、平安な義の実を結ばせることです。救い主は、私たちを救って終わりではなく、そこから、私たちの不信仰の罪を洗い流してくださいます。そして、神との関係を豊かなものにしてくださるのであります。ヨハネは、このように私たちを救って清めてくださる方が来られると言っているのです。

## ※ ペンテコステ

聖霊の働きは、もう一つあります。

「ヨハネはみなに答えて言った。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりもさらに力のある方がおいでになります。私などは、その方のくつのひもを解く値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。」（ルカ 3:16）

キリストは、私たちの罪を赦し、救いを与えるという恵みを与えてくださいました。しかし、さらなる恵みがあるというのです。

「ヨハネは水でバプテスマを受けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」（使徒 1:5）

イエス・キリストの弟子たちは救われて、神の言葉を信じる信仰が、確かにありました。しかし、イエス様が十字架に架かる前に裏切ってしまいました。それは、心は神に向いていたにも関わらず、力がなかったからです。信仰はあっても、それを自分のものとして使う力がなかったのです。運転技術も車もあるのにガソリンがなかったということです。彼らは現実の苦難に負けてしまいました。イエス様はそんな弟子たちに向

かつて、「私があなたがたに約束していることはまだある」と言っておられます。それがペンテコステの出来事です。

「しかし、聖靈があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」（使徒 1:8）

イエス・キリストが復活した後も、弟子たちに伝道する力はありませんでした。しかし、聖靈に力を与えられることによって地の果てにまで証人となる、だから、その日を待っていなさいと、イエス様は言われました。そして、その日がやってきたのです。

「五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖靈に満たされ、御靈が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しだした。」（使徒 2:1-4）

皆が自分の知らない言葉で話し出す、神が語らせてくださるこの言葉を「異言」といいます。皆が異言で祈るようになったこの出来事を「ペンテコステ」といいます。この出来事が、聖靈のバプテスマを受けたということです。

「神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖靈を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖靈をお注ぎになったのです。」  
(使徒 2:32-33)

聖靈を受けるということは、神が約束してくださったことです。

「そこで私が話し始めていると、聖靈が、あの最初のとき私たちにお下りになったと同じように、彼らの上にもお下りになったのです。私はそのとき、主が、『ヨハネは水でバプテスマを受けたが、あなたがたは、聖靈によってバプテスマを受けられる』と言われたみことばを思い起こしました。こういうわけです

から、私たちが主イエス・キリストを信じたとき、神が私たちに下さったのと同じ賜物を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが神のなさることを妨げることができましょう。」（使徒 11:12-17）

ここに、異邦人の信仰者が異言を語ったことが記されています。このようにして、異言を語る人々が次々に起こされました。これがペンテコステ運動です。これと共に福音が全世界に広がっていったのです。

その後、ペンテコステ運動は下火になりますが、20世紀初頭に再び大きなムーブメントが起こりました。それは、信徒の中から「聖書に書いてあるこの出来事が、今起きていなければどうしてだろうか？私たちも異言を求めて祈ってみよう」という素朴な疑問と祈りから始まった出来事でした。異言を求めて祈った結果、次から次へと異言で祈る人々が起こされ、しかもそれが一か所ではなく、世界中の各地で同時に起きたのです。この20世紀のペンテコステ運動は、カトリックもプロテスタントも関係なく、教派を超えて、信徒の間に広がりました。こうして、20世紀の教会の歴史はペンテコステの歴史となったのです。ペンテコステ運動が勢いを増し、福音が広がり、ペンテコステの教会が大きく成長しました。このように福音が爆発的に広がることをリバイバルと呼びます。既存教会の中には、当初は異言を認めないという教会もあり、そこから新しくペンテコステ教会が生まれたりもし、振り返ってみると、20世紀はペンテコステ教会がキリスト教界全体を引っ張ってきたといえるでしょう。

異言の目的は、神様に心を向けるところにあります。日常語での祈りに限界を感じた時、異言によって祈ることで神様から力を得ることができます。これは、賛美も同じことが言えます。異言も賛美も、日常の言葉よりも長い時間神様と交わり、心を神に向けることで、力を得るのです。ですから、ペンテコステ運動は賛美の改革でもありました。ペンテコステ運動と同時に、従来の讃美歌・聖歌とは異なる新しい歌が次から次へと生まれ、今はそれが主流になりました。

これらの流れは、弟子たちが聖霊の力を受けたところから始まっているわけです。ですから、救いを受け取り、恵みを受け取ったなら、ぜひ次は聖霊の力を受け取るため、聖霊のバプテスマを求め、異言で祈ることを求めるましょう。

ただし、聖霊のバプテスマについては、一步間違えると教会に混乱を招く危険性があるため、パウロは次のように教えています。

「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深

「いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。人間の心を探り窮める方は、御靈の思いが何かをよく知つておられます。なぜなら、御靈は、神のみこころに従つて、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」

(ローマ 8:26-27)

パウロはこのように語つて異言の賜物を勧めていますが、同時に、教会が間違った方向に進まないように、次のような注意を与えています。

「異言を話す者は、人に話すのではなく、神に話すのです。というのは、だれも聞いていないのに、自分の靈で奥義を話すからです。・・・異言を話す者は自分の徳を高めますが、預言する者は教会の徳を高めます。私はあなたがたがみな異言を話すことを望んでいますが、それよりも、あなたがたが預言することを望みます。もし異言を話す者がその解き明かしをして教会の徳を高めるのでないなら、異言を語る者よりも、預言する者のほうがまさっています。・・・もし私が異言で祈るなら、私の靈は祈るが、私の知性は実を結ばないです。ではどうすればよいのでしょうか。私は靈において祈り、また知性においても祈りましょう。靈において賛美し、また知性においても賛美しましょう。」

( I コリント 14:2-15 抜粋)

異言と賛美は、両方とも、神に近づき、神の力を受け、神に導かれていくという目的は同じです。ただし、異言で祈る場合は、靈は満たされますが、自分では理解できない言葉であるため、知性では理解することができません。賛美の場合は知性も反応します。この点をわきまえて、パウロは次のように勧めます。

「そうでないと、あなたが靈において祝福しても、異言を知らない人々の座席に着いている人は、あなたの言っていることがわからないのですから、あなたの感謝について、どうしてアーメンと言えるでしょう。あなたの感謝は結構ですが、他の人の徳を高めることはできません。・・・それゆえ、私の兄弟たち。預言することを熱心に求めなさい。異言を話すことも禁じてはいけません。ただ、すべてのことを適切に、秩序をもって行いなさい。」

( I コリント 14:16-40 抜粋)

パウロはこのように、異言の祈りは個人で行い、公の場では知性で賛美せよと勧めています。

聖霊のバプテスマを受け、異言で祈るようになると、力をもって信仰生活を送れるようになります。弟子たちは聖霊のバプテスマによって変わり、全世界に出て福音を伝えるようになりました。

聖霊は人を救い、罪の赦しに導くだけでなく、力を与えてくれます。これは賜物ですから、求めれば与えられます。聖霊のバプテスマを求める方は、ぜひ教会にご相談ください。